＊＊＊＊＊＊あなたの町の情報誌＊＊＊＊＊＊

住まいル新聞

日本ステンレス工業株式会社
発行/日本ステンレス工業株式会社
〒409-0617 山梨県大月市猿橋町殿上630-1
電話=0554-22-2500
FAX=0554-22-5234
Vol.144 2011 9月号

大月人物伝 県土木会の重鎮 大月の三太郎の頭領 長沼 熊太郎

長沼熊太郎は明治九年十二月二十日、広里村駒橋の農家に生まれた。青年期から、運送業、土木建築請負などに打ち込み、業界の実力者として地歩を固め、同時に消防組部長などの地域の公職について活躍する。

明治三十五年十月一日、中央線大月駅が開通し、約二時間で八王子に行くことが可能となり、また翌年には、現在の富士急行線の前身、富士鉄道馬車が開通し、都留・富士吉田との交通が容易となり、かっての小さな宿駅大月に周辺の村々から人が集まり、振興の大月が新しい流通と商業の拠点となった。熊太郎は、大月駅にて取り扱う鉄道貨物輸送の荷揚げを一手に引き受ける運送業者としてその頭角を現した。中でも明治三十九年に、東京に安定した電力を送り、明治末の日本全土に電力の新時代をもたらした記念碑的な水力発電所駒橋発電所の工事がはじまり、建設に必要な発電機や機械、資材の搬送は、中央線の鉄道貨物輸送により行われたので、大月の他の運送業、清水家・牧野家・天野家等と共に、熊太郎も財を成し、大月の有力者として地域の政治に参与する人材となった。

大正二年には、広里村村会議員に当選、再選を重ね、昭和八年町制施行により、大月町議会議員となり、それより二十二年まで連続、実に九期三十六年間の長期にわたり在職、議会の長老として自治の運営に多く貢献し、消防組でも顧問となり消防施設の整備改善にも寄与した。

一方建設関係を中心に事業も次第に発展拡充し、鉄道建設の大手名工建設株式会社と提携して取締役となり、同社甲府支社長に就任し手腕を発揮し業績をあげ、業界でも重視され各種役職を歴任、山梨県土木建設業協会長、同顧問に推された。

また昭和十四年の県議選には民政党より推されて立候補当選、任期満了の十八年以降も任期延長で二十二年四月まで在任、戦時中から終戦時にかけての混乱動揺のはげしかった県政の運営に寄与した。

また二十二年改正府県制によって執行された県会議員選挙に、民政党より推されて出馬当選し、戦前派四議員の一人として条例委員長に就任、二十三年九月には池谷議長のあとを受けて議長に当選したが、小党分立して安定勢力を欠いたため、離合集散の激しい中で、困難な問題が多発し、同年十一月の定例会で、県教育委員の選任問題のこじれから議場混乱し、三日間にわたり議事停滞を招き、ために議長の責任を追及される

など紛議を重ねて議事の収拾は難渋をきわめたが、たまたま病床についたので議会運営は副議長によって行われた。

その後、議長反対派との間に妥協が成立したので二十四年三月、一応議長を辞任したが、議会で直ぐに再選されたので、改めて辞任の手続中病状が悪化して急逝した。

熊太郎の葬儀のとき、自宅を出た葬列の先頭が林宝山行願寺近くまで来たのに後列はやっと表通りに出たところであったくらい多くの人々が葬列に加わり、行願寺前の広場で盛大な告別式が行われた。

政財界の著名人を初め、一般市民も葬儀に参加、告別式場は一杯の人で埋まった。当時自由党の国務大臣樋貝詮三先生は党派を超えて秘書官を通じ丁重な弔辞を捧げられた。葬儀のとき自宅から寺まで棺を担いだ若者は全員長沼家縁の青年達であった。二度目の県議会在職のまま他界した。

熊太郎は、地域でも早くからリーダーとして活躍されていて、その手腕が買われている。大正五年五月三日に起きた都留中学のストライキの際も、広里村村長伊藤弁次郎と共に、ストライキ収拾のための学生の説得に当たるなど、その人望の程が伺える。また大正十二年四月開校された県立都留高等女学校校舎の建築にも関与貢献している。特筆すべきは、昭和二十一年に、戦後の復興を担う大工職人の不足状況を改善するため、自ら所有する土地の一部に、県立木工人養成所を誘致設立、木工職人の人材の育成に、県議会議長として手腕を発揮し、地域青年の雇用の促進にも力をそそいだ。

他面、熊太郎は、幾多のエピソードを残していて、その人柄が偲ばれる。その一つは、ダンディな紳士と言われ若い時からお洒落で洋服はいつも三つ揃いの英国製の背広を着ていて、色は茶色を好んだらしく茶色が多く、靴はピカピカに磨かれた物を履いていた。和服は紋付袴がよく似合う清潔感溢れる好男子であった。

熊太郎が大月で活躍した時代、もう二人太郎という名前の人がいて、地元では当時、これらの三人を大月の三太郎といっていたそうである。一人は高山角太郎（土建業）で、駒橋出身の人である。彼の長男武士は、東北帝国大学医学部卒業後、大月に帰り、地域住民の医療福祉に貢献した医師である。

また他の一人は、西奥山出身で屋号大屋の山口金太郎である。彼も若くして大月に出て、駅前で手広く大きな材木商を営み相当な財を成したが、残念なことに、四十代半ばで、小学生だった長男勲をはじめ四人の男の子達を残して他界した。

三人の三太郎は、仲良しで、それぞれの仕事の分野を守り、互いに助け合って活躍した。

資料提供者
山梨県議会事務局

参考文献
同窓（都留高の歩み）

執筆者 井上 文次郎